
花屋と死臭

曾口十士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花屋と死臭

【著者名】

乙一

曾口 十士

【あらすじ】

僕は死ななくちゃならない。そう思って日々を過ごす主人公のバイト先での出来事。

死にたいと思つたことは一度もない。

僕はバイト先の花屋のカウンターに頬杖をついて、ぼんやりと考えていた。

雨粒がいくつもへばりついたショーウィンドウの向こうには、灰色に沈む雨の街の景色が広がっている。

「死にたいとは思わない。けど……」

ぽつりとつぶやいてみた。言葉が湿っぽい空氣にまぎれると、なんとも言えない虚無感がこみあげてくる。たまらずに僕はガラス戸の向こうに視線を投げた。

菜の花が似合いそうな柔らかな雨だ。街全体を覆う雨粒が、汚れたビルの壁面を洗い流し、あるいは通行人が手に持った傘の色彩をくすませ、さらには宣伝車の拡声器からこぼれる通り一遍の売り文句を湿らせる。そうやって春の雨は人の嘗みにいちいちケチをつけるように降りしきり、流れていった。

死ななくちゃいけないんだろうな、とは思つてはいる。いつか僕は自分の手で自分の人生にケリをつけなくちゃならない。マンションの屋上の柵を越えるのか、ロープで作った輪の中に首を通すのか、ちゃんとイメージができるといいけれども。

塊りのようになにかの群れを見ながら、僕は幸せな人生というものを想像してみた。たくさんの仲間に支えられて困難な事業をやり遂げる。あるいは大好きな人と結婚し、温かい家庭を築いて子どもたちを育てる。

たいへん結構な人生だ。そんな人生を歩むのなら、生まれてきた甲斐があると思うに違いない。そう思いながら僕は静かに瞳を閉じた。

頭に浮かんだ幸福な映像が闇にくるまれた。路地を叩く雨の音がまるで砂嵐を映すテレビのように耳障りに覆う。その中で僕の思考

は静止した。像を結んでいたはずの幸福な人生が少しづつぼやけて、色褪せていく。再び目を開ける頃には、幸福の正体が何であつたのかすらおぼろげになつていた。

幸福な人生つて、たかだか数秒間の沈思にも耐えられないほど脆弱なのなんだろうか。僕はそつとため息をついた。だけど、店内に所狭しと並べられた鮮やかな切花を眺めているうちに、僕はふと思いついた。「幸福」というものに対してそれほどまでに脆弱なイメージしか描けない僕の考え方っこそ、大きな問題があるんじゃないだろうか。

「だから、僕は死ななくちゃならない」

それがいつなのか。僕にはまだ分からぬ。でも、こんなふうに精神に負債を抱えたままで生きていけるとは到底思えない。たまりにたまたま負債はいつの日にかバーストして、清算を迫られる。「自殺」という言葉が清算の手段としてもつともぴったり当てはまつている、と僕は感じていた。

ショーウィンドウの向こう、雨の景色の中でも黄色が動いた。それが女性用の傘だと、すぐには分からなかつた。黄色の傘は鮮やかに灰色の街から浮き上がりつていて、僕の目に眩しく映つていた。傘の主は店の近くの歩道で立ち止まって、何かを探しているようにキヨロキヨロとあたりを見回している。やがてこの店を見つけると、まつすぐに歩いてきて自動ドアを開いた。

「いらっしゃいませ」

僕はあわてて立ち上がりつて、お辞儀をする。顔を上げると、そこには見覚えのある女の子がドアをくぐついていた。

「あ、水原さん」

彼女は僕と同じクラスの女の子で、水原さん。失礼な話だけど、下の名前ははつきりとは覚えていない。コミとか、コミコとかそんな名前だつたはずだ。一年間同じ教室で過ごしたけど、話をしたことは数えるほどしかない。わざわざ僕のバイト先を訪ねてくるほど親しい間柄ではなかつたはずだ。

「こんにちは、高城くん」

濡れた傘をたたみながら、水原さんが「こやかに微笑んだ。癖のないショートの髪が優しそうな顔立ちによく似合っている。春らしいパステルカラーのワンピースもおとなしい彼女のイメージとぴったりだった。七分袖から伸びた細い腕が驚くほど白い。

「ごめんね、突然来たら迷惑だったかな?」

「そんなことないよ。雨の日はなかなかお客様さん来ないから」

水原さんは恥ずかしそうに眼鏡の奥の瞳を伏せた。朝から降り続いた雨のおかげで、ただでさえ少ない平日の客足がぱつたりと絶えていた。僕にとつては予想外の来客だったけど、ドアの外を見ながら妄想にふけるよりはよほびマシだ。

「春休みの間はこの花屋でバイトしてるので、この前面つてたから。近くまで来たついでにお邪魔してみたの」

「買い物でもしてたの?」

「つうん、散歩……みたいなものかな」

へえ、と僕は口の中だけで呟く。こんな雨の中をわざわざ散歩に出かけるなんて、水原さんは見た目通りロマンチストな女の子らしかった。

「いいお店だね。キレイな花がいっぱい、それにいい香り」

店内を見回した水原さんが、すっと目を細める。

「高城くんて、花が好きなんだね。クールなイメージだったから、ちょっと意外」

「別に好きじゃないよ」

「え? でもバイト先に花屋を選んでるじゃない?」

「花が好きなんじゃなくてね」

僕は水原さんから目をそらす。この先の言葉を継ぐかどうか、迷つたのはほんの一瞬だった。

「花に囲まれたこの席が気に入つたんだ。カウンターのこの席つてさ、いろんな色の花に囲まれてて、まるでお墓みたいだろ。自分が葬られているような感じがして気分がいいんだ」

案の定、水原さんは狐につままれたような顔をしてる。僕はそんな彼女の反応を無視して話を続けた。

「それに弔いの花に囲まれたこの席に座つていると、僕が死んだ後の世界が見えるような気がするんだ。変な話だろ。僕が死んでしまつたあとでも、今日みたいに雨が降つて、みんな傘をさして歩いて。たぶん、僕が死んだあとでもこんな何でもない日常がずっと続していくんだ。そう考へると、ほら、僕はもう死んでるんじゃないか、そんな気にさえなつてくるんだ」

こんなこと水原さんに話しても、薄気味悪く思われるだけのに、僕はなんて馬鹿なことをしてるんだろうか。

だけど水原さんは僕から目を離さない。驚いたような顔をしていたのはほんの少しの間だけで、いまの彼女は気のせいか少し笑つているような表情を浮かべて、僕の顔を見ていた。

「ねえ、わたしもその席に座つてみたい」

予想外の言葉に僕は自分の耳を疑つた。水原さんは僕の返事を待つでもなく、イスを持つていそいそとカウンターの中に移動してきた。僕の隣にイスを置くと、「へへ」と悪戯っぽく笑いかけて腰を下ろした。

僕は水原さんの突然の行動が理解できずに、あっけにとられていた。隣の水原さんと見つめあうわけにもいかず、僕たちは映画でも見るような感じで、並んで店内を見つめていた。

カウンターの横には六種のチューーリップがバケツに入れて並べられている。原色に近い六色の花が円を描くように配置されていて、鮮やかな色彩とともに芳しい香りが僕たちを包む。その隣ではマーガレットの束が可憐な白い花を咲かせていた。

「これがわたしが死んだとの世界……」

水原さんは雨雲がのっぺりと覆つた暗い空を見つめていたかと思うと、やがてゆっくりと瞼を閉じた。表情の消えた彼女の顔は幽かに玄い。小さな額の奥でどんなことを考へているのか、僕にはまったく分からなかつた。

「こんな話知ってる？ 死者の弔いにお花を捧げるのは、お花の匂いで死臭を隠すためなんだって」

田を開いた水原さんはちらりと僕の顔を見た。

「その話がホントなら、いまのわたしたちはこんなにたくさんのお花で隠さなくちゃならないほどなの、とんでもない臭いが漂っているのでしょうかね」

そういって水原さんは、そもそもおかしそうに笑つた。

「……なんで？」

僕は呆然と水原さんの優しげな顔を見つめた。なぜ彼女はいつも自虐に近いことを言うのか、僕にはさっぱり分からぬ。

「高城くんはビリして？ ビリして死にたがってるの？」

質問に質問で返すのは卑怯だ、と思いつつも考え込んでしまひ。

「分からぬよ、そんなこと」

分かつたら苦悩はない。何かが足りないから生きるのがイヤというのとは違う気がした。例えば、僕に何か飛びぬけた才能があつたら、あることは世界がもっと面白くて謎に満ちていたら、生きようと思つだらうか。考へてもピンとこない。それよりももっと根源的で別の方に向ふ問題があるような気がした。僕は僕自身であるがゆえに死ななければならぬ、とでもいえばいいだらうか。

考へてる間に、隣の水原さんが立ち上がつた。

「せつかく來たんだから、何か買つていくわ」

「贈り物？ 予算とイメージを言つてくれたら、花束を作るよ」

「うん……そうね、枯れない花がいい」

えつ、と言つたまま、僕は言葉につまる。この店においてあるのは切花がほとんどで、ドライフラワーとか造花は扱つてない。

「ごめん、そういうのは売つてないんだ」

「ああ、そうよね。ごめんなさい、変なこと言つて」

水原さんは視線を落とした。肩を丸めた姿がいかにも力無さげで、舞い落ちる一枚の桜の花びらように儂く見える。

「母さんがね……死んじやつたの。今朝、入院先の病室で血をいつ

ぱい吐いて……

え？

僕は顔全体から血の気が引いていくのを感じた。その感触はあまりにも冷たい。顔だけが雨に打たれているような感じがして、僕は思わず口元を手で覆つた。

「だからせめて、枯れないお花を母さんに捧げたかったんだけど。ごめんね、おかしなこと言つて」

水原さんは俯いたまま瞳を揺らしていた。

「ごめん……なんて言つていいか、ええと」

適当な言葉が見つからない。生きるのを急けていたツケは、たぶんこんなところに出てくるんだ。たつた一言、水原さんを元気づける言葉が、僕には出でこなかつた。

「いいの。高城くんに慰めてもらつほど、わたしたち親しい仲じゃないものね」

言いながら微笑んだ水原さんの顔が頭に焼き付いてしまう。彼女は僕なんかよりもはるかにリアルな死に衝突していた。なのに水原さんは優しい微笑みを僕に向ける。その顔がかえつて悲しく見えてきて、僕の手はぶるぶると震えていた。

それじゃ、と言つて水原さんは傘を開いて店を出でていった。僕には何一つ言葉をかけることができない。なんで神様はどうでもいい僕のような存在は生かしておいて、水原さんの母親の命を奪つてしまうんだ。

身勝手な怒りに任せて、僕はカウンターの足を蹴りつけた。乾いた音が店内に響くと同時に、足元に置いてあつた商品が床に転がる。（あ！）

転がつた商品を目にした瞬間、僕は弾かれたよじにそれを手にとつて、水原さんが去つていつた歩道へと駆け出した。彼女は店のすぐ近くで黄色の傘を揺らしていた。

「水原さん！」

呼びかける僕の声に、驚いて肩を震わせた。振り返つた彼女の瞳

に小さな粒の涙が浮かんでいる。

「これ、僕から水原さんのお母さんに

雨に濡れるのもかまわず、僕は手にした商品を差し出す。苗木のポットに枝が一本差し込まれている。葉も花もない味氣ないそれを見て、水原さんはわけがわからないようだった。

「梅の苗木。上手に育てれば、何十年もこの時期に花を咲かせるから

水原さんは、おそるおそる苗木に手を触れた。

「毎年春に、母さんを弔う花を咲かせるのね」

僕は軽く頷いた。前髪にたまつた雨粒が顔をすべり落ちていく。「枯れない花」という水原さんの希望には応えられないけど、「毎年咲く花」が僕の出した精一杯の言葉だった。

「ありがとう。値段はいくらくらい?」

「いらないよ。これは僕からのプレゼント」

「ダメ。これはわたしから母さんに贈りたいの」

水原さんが頬を緩ませる。その拍子に瞳にたまっていた涙が一滴、頬を伝つて流れ落ちた。

「新学期になつたら払うわ。また同じクラスになるといいね。そしたら、今度の一年はもつといっぱい話しかけてね」

「約束する。いや同じクラスにならなくとも、話しかけるよ」

水原さんは可憐に微笑むと、手を振つて去つていった。僕は雨に濡れるままに、しばらく路上に立ち尽くしていた。

僕の胸に温かい感情が広がりつつあった。鉛のようにわだかまつていた僕の心の負債も少しづつ溶け出していくようだ。

なぜなのは分からぬ。僕は儂げな水原さんに夢中で手を差し伸べただけだったはず。なのに、僕の方が救われたような感覚が残つていた。

もしかしたら、「生きる」つていうのはほこりこりことかもしれない。心に負債を抱えながらでも、虚無感にさいなまれながらでも、誰かとそれを分け合えたら。

糠を振りまいたような優しい雨が、僕の体に柔らかく染みこんでいくようだった。

(後書き)

以前、某所で読んでいただいてアドバイスいただいたお話を修正したものです。その節はありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3359h/>

花屋と死臭

2010年10月8日14時19分発行